

「夜の鶴」の語彙

若林俊英

一

本稿は、「十六夜日記」の作者として知られる阿仏の手になる歌論である。「夜の鶴」の自立語語彙に関して、その使用実態の一端をまとめたものである。

「夜の鶴」の成立については、必ずしも明確ではないが、おおむね、鎌倉滞在中の著作と考えられている⁽¹⁾ようである。したがって、「十六夜日記」とほぼ時を接して成立したことにもなるので、本稿では、主として「十六夜日記」の語彙との比較を通して「夜の鶴」の語彙をみることにする。

語彙調査をするに当たっての単位語のとり方については、宮島達夫氏編『古典対照語彙表』(昭和四十六年九月、笠間書院。以下、『語彙表』と略称する⁽²⁾)における認定基準を、おおむね使用させていた

だいた。また、語数調査および本文の引用に関しては、宮田裕行氏編『影印本 四条局口伝(夜の鶴)』(昭和五十六年四月、新典社。底本は、宮内庁書陵部蔵『四條房口傳』(五〇一・一一三))および江口正弘氏編『十六夜日記 校本及び総索引』(昭和四十七年八月、笠間書院。底本は、細川家永青文庫蔵『いさよひの日記』)によつた⁽³⁾。なお、以下、語数に関しては、特に注記しない限り、異なり語数とする。

二

まず、品詞別構成比についてみることにする。

表(1)および表(2)に示したのが、「夜の鶴」と「十六夜日記」の品詞別異なり語数、延べ語数、および、それぞれの品詞別構成比率である。以下、この表(1)、表(2)に示した異なり語数における

表(1)

	名詞	動詞	形容	形動	副詞	連体	接続	感動	他	合計
異なり語数	275	162	31	20	29	4	0	0	4	525
%	52.4	30.9	5.9	3.8	5.5	0.8	0.0	0.0	0.8	100.1
延べ語数	629	344	81	27	85	10	0	0	4	1,180
%	53.3	29.2	6.9	2.3	7.2	0.8	0.0	0.0	0.3	100.0

表(2)

	名詞	動詞	形容	形動	副詞	連体	接続	感動	他	合計
異なり語数	678	389	84	38	46	4	1	2	1	1,243
%	54.5	31.3	6.8	3.1	3.7	0.3	0.1	0.2	0.1	100.1
延べ語数	1,824	1,025	215	94	184	55	1	2	1	3,401
%	53.6	30.1	6.3	2.8	5.4	1.6	0.03	0.06	0.03	99.92

数値を、『語い表』所載の一四作品におけるそれと比較する。

名詞の比率についてみると、「夜の鶴」「十六夜日記」とも、中世の「方丈記」「徒然草」における比率よりも低く、中古の「古今和歌集」(五五・一パーセント)、「後撰和歌集」(五三・三パーセント)、

「伊勢物語」(五四・六パーセント)、「土左日記」(五五・〇パーセント)、「枕草子」(五三・五パーセント)、「紫式部日記」(五〇・七パーセント)、「更級日記」(四九・一パーセント)と比較的近似したものととなっていることがわかる。次に、動詞についてみると、「方丈記」(二九・二パーセント)、「徒然草」(二九・四パーセント)よりは高いものの、比較的近似した値となっていることがわかる。と同時に、中古の「伊勢物語」(三二・九パーセント)や「土左日記」(三〇・六パーセント)に、より近似した値となっていることも注目される。形容語類(形容詞・形容動詞・副詞・連体詞)における比率をみると、「夜の鶴」は一六・〇パーセント、「十六夜日記」は一三・九パーセントであることがわかる。「夜の鶴」の一六・〇パーセントという数値は、『語い表』所載の一四作品における同様の数値のどれよりも高いものであり、また、「十六夜日記」における一三・九パーセントは、「紫式部日記」(二四・九パーセント)、「更級日記」(二四・九パーセント)、「竹取物語」(二四・六パーセント)、「蜻蛉日記」(二四・一パーセント)に次ぎ、「土左日記」(一三・七パーセント)よりも高いものとなっていることがわかる。次に、延べ語数における比率をみることにする。

まず、名詞についてみると、「夜の鶴」「十六夜日記」とも、『語い表』所載一四作品における同様の値よりも高いが、「古今和歌集」(五三・二パーセント)、「大鏡」(五三・二パーセント)、「万葉集」(五二・八パーセント)に近似した値であることもわかる。動詞の

比率をみると、「夜の鶴」「十六夜日記」の二作品における数値と近似した作品としては、「方丈記」(二九・七パーセント)、「大鏡」(二九・六パーセント)、「紫式部日記」(二八・二パーセント)が存するが、他の一作品は、「十六夜日記」における三〇・一パーセントよりも比率は高い。形容語類をみると、「夜の鶴」一七・二パーセント、「十六夜日記」一六・一パーセントとなり、「大鏡」(一六・九パーセント)、「方丈記」(二七・五パーセント)、「徒然草」(二七・八パーセント)に近似している。

以上、「夜の鶴」および「十六夜日記」における品詞別構成比率について、『語彙表』所載作品におけるそれと比較することによってみてきた。その結果、「夜の鶴」および「十六夜日記」の品詞別構成比率は、異なり語数においては「伊勢物語」や日記類に、また延べ語数においては院政期の「大鏡」や中世の「方丈記」に、それぞれ相対的に近似していることがわかった。また、「十六夜日記」は、王朝女流日記の系統を継ぐものであると言われるが、それは、日記文学作品の使用語彙における形容語類の品詞別構成比率と「十六夜日記」におけるそれとが近似していることから言えそうである。

なお、ジャンルと品詞別構成比率については、大野晋氏の研究⁽⁵⁾がよく知られている。この研究に対しては、否定的な見方も存するが、大野氏によれば「十六夜日記」はCグループ(日記グループ)に属させることとなる。江口正弘氏は、品詞別構成比に関する大野氏や

伊牟田経久氏の調査結果と、「十六夜日記」に関するそれを表にまとめ、「十六夜日記の品詞比率は大体日記グループのほぼ中ほどの比率を示している」とし、「十六夜日記」を「紫式部日記」と「讃岐典侍日記」との間に当てはめておられる。しかし、筆者の調査によれば、「十六夜日記」の品詞別構成比率は、必ずしも前記二作品の間に当てはめられるような明確なものとはなっていない。

三

表(3)は、『語彙表』所載の一四作品における異なり語数、延べ語数での品詞別構成比率に関して、異なり語数での比率を一とした場合の、延べ語数での比率をまとめたものである。この表(3)からすると、品詞別構成比率は、一般的に、名詞および形容動詞においては異なり語数での、形容詞、副詞および連体詞においては延べ語数でのそれが、それぞれ高いことがわかる。この一般的傾向を踏まえた上で、表(1)および表(2)をみると、「夜の鶴」における名詞、「十六夜日記」における形容詞が、それと相違していることがわかる。また、動詞⁽⁸⁾については、両作品とも異なり語数における品詞別構成比率の方が高くなっているが、これは表(3)からわかるように、「竹取物語」「蜻蛉日記」「枕草子」「源氏物語」「紫式部日記」「更級日記」と同傾向である。

「夜の鶴」の名詞において、延べ語数での比率が異なり語数での

表(3)

	名 詞	動 詞	形容詞	形 動	副 詞	連体詞	その他
万葉	0.884	1.089	1.576	0.800	0.938	28.000	0.667
竹取	1.016	0.993	0.859	0.441	1.200	3.500	0.667
伊勢	0.903	1.157	0.845	0.571	1.158	5.200	0.500
古今	0.966	1.058	1.160	0.579	0.610	5.667	1.000
土左	0.904	1.131	0.889	0.545	1.064	6.800	0.571
後撰	0.976	1.014	1.380	0.524	0.750	4.667	0.625
蜻蛉	0.866	0.997	1.339	0.651	2.306	4.333	1.167
枕	0.826	0.942	2.455	0.682	3.478	4.500	0.400
源氏	0.981	0.738	2.038	0.843	4.316	16.000	1.000
紫	1.037	0.832	1.275	0.723	1.871	5.500	0.500
更級	0.953	0.969	1.258	0.714	1.395	6.667	0.333
大鏡	0.833	1.147	1.349	0.667	2.625	14.000	1.000
方丈	0.901	1.017	1.208	0.793	1.595	4.200	2.500
徒然	0.838	1.105	1.714	0.875	1.607	10.500	0.750

比率より高いのは、名詞の種類に比べ、繰り返し使用される語（基本的な語・作品の特徴語）が比較的多いということであろう。高頻度語における名詞の延べ語数での比率が、表(1)に示した全体での比率より高くなるならば、右のように言えるが、以下、この点について具体的にみることにする。

ところで、どの程度以上の度数を持つ語を高頻度語とするかについては議論があるが、ここでは、使用度数一〇以上の語を仮に

「夜の鶴」の高頻度語とし、以下、みることにする。

右のような語を「夜の鶴」の高頻度語とすると、それは、異なり語数で一七、延べ語数で三二四、累積使用率二七・四六パーセントとなる。うち名詞は八語である。また、「夜の鶴」の使用実態と比較するために、「十六夜日記」において累積使用率がほぼ等しく（二六・七九パーセント）なる使用度数一四以上の語を示すと、それは、異なり語数三七、延べ語数九一であり、うち名詞は一七語である。

「夜の鶴」の高頻度語における名詞の異なり語数、延べ語数での比率は、それぞれ四七・一パーセント、五五・六パーセントとなり、表(1)でのそれと比較すると、延べ語数において高いことがわかる。一方、「十六夜日記」におけるそれらは、それぞれ四五・九パーセント、四三・一パーセントとなり、延べ語数における比率は、表(2)と比較すると低いことがわかる。以上の点からしても、前述のことは言えそうである。

次に、頻用された名詞について、より具体的にみることにする。

「夜の鶴」において度数一〇以上の名詞は、

「こと(事)」「うた(歌)」「ひと(人)」「こころ(心)」「だい(題)」「よ(世・代)」「やう(様)」「つき(月)」「

の八語。また、「十六夜日記」において度数一四以上の名詞は、

「ひと(人)」「ほど(程)」「うた(歌)」「こころ(心)」「こころ(所)」「よ(世・代)」「みやこ(都)」「つき(月)」「やま(山)」「こと(事)」「みち(道)」「なみ(浪)」「かへりごと(返

事)「むかし(昔)」「そら(空)」「あと(跡)」「かた(方)」の一七語である。

これらのうち、基本的な語を除いた、各作品の特徴語と思われるものとして、「夜の鶴」においては、「うた」「だい」「つき」を、「十六夜日記」においては、「あと」「うた」「かへりごと」「そら」「つき」「ところ」「なみ」「みち」「みやこ」「やま」を、それぞれ指摘できるであろう。

「夜の鶴」における「うた」「だい」は、歌論として当然頻用されるべきものである。また、「つき」に関しては、

例1 あかねさす久方の月あしひきの山 (二オ¹⁰)₉

のような枕詞の指摘での使用、

例2 順か詩に雨のうちに月をこふといふ題にて (五ウ⁶)

例3 又月前恋月によする恋といふ題を (一三オ⁶・⁷)

のような詩題や結び題での使用、

例4 恋しさのむなしき空にみちぬれは月も心のうちにこそすめ (一三ウ⁹)

のような歌中での使用等、歌論としての「夜の鶴」という作品の内容に直接かかわる語であると言える。

次に、「十六夜日記」において特徴的であると指摘した一〇語についてふれることにする。

「十六夜日記」は、その内容によって四部に分けられることが多いようである。たとえば、森本元子氏は、「十六夜日記」を、「序

表(4)

	あと	うた	かへりごと	そら	つき	ところ	なみ	みち	みやこ	やま
序	6	5	3	3	1	0	0	8	0	1
旅路	3	1	0	1	10	20	9	9	5	17
望郷	0	19	14	11	10	5	8	2	16	3
献歌	5	4	0	1	0	2	1	1	1	0
合計	14	29	17	16	21	27	18	20	22	21

章「旅路の章」「望郷の章」「献歌」の四章に分けておられるが、この各章での前掲一〇語の使用度数をまとめると、表(4)のようになる。

この表(4)を一瞥してわかることは、「旅路の章」において「つき」「ところ」「なみ」「みち」「やま」が、「望郷の章」において「うた」「かへりごと」「そら」「つき」「なみ」「みやこ」が頻用されているということである。なお、「序章」において「みち」が頻用されていることも注目される。以下、注意すべき用例について、一、二ふれる。

「序章」における「みち」の用例は、その多くが、

例5 さらにおもひつゝくれはや
また歌のみちは(一ウ²)

のような、全体で「歌道」の意となる文脈で使用されたものであり、例6 このたひのみちのしるへにをくらんとていたゝるめるを

のような「旅」の意のものはわずかである。一方、「旅路の章」に

(五ウ²)

おける「みち」の用例は、

例7 関よりかきくらしつる雨しくれに過て降くらせは道もいとあしくて (八ウ④)

のような「道」の意や、

例8 過行道に目にたつ社あり (九オ②)

のような「途中」の意のものがほとんどで、「歌道」の意となる文脈でのものは、

例9 をのつからつたへし跡もあるものを神はしるらんしきしまのみち (一八ウ②)

の一例に過ぎない。

次に、「旅路の章」における「つき」の用例をみると、

例10 十七日の夜はをのゝ宿といふ所にとゝまる月出て山の峯に立つゝきたる松の…… (七ウ⑨)

のような地の文でのものが五例(うち、「有明の月」という用例一

例)、

例11 旅人のおなしみちにや出つらむかさうちきたる有明の月 (二二ウ④)

のような歌中でのが五例(うち、「有明の月」という用例三例)、それぞれ存する。一方、「望郷の章」における「つき」の用例は、その多く(七例)が、

例12 おほろなる月はみやこの空なからまたきかさりし波のよる

く

(二六オ②)

例13 ねられしな都の月を身にそへてなれぬ枕の浪のよるく (二六オ⑧)

のような、阿仏と都に住む人(貴人・権中納言の君)との贈答歌中の用例であり、他の用例中二例も、

例14 又権中納言の君こまやかに文かきて……ひとり月をのみな かも明してなとかきて (三四ウ⑤)

のような、和歌の贈答に関わる書簡での用例や、

例15 いさよふ月と音つれ給へりし人の御もとへ (二五ウ⑩)

のように和歌をうけた記述での用例である。

以上、「十六夜日記」の特徴語と思われる語群を、いささかみてきた。それによると、これらの頻用は、「十六夜日記」の記述内容と密接に関わっているであろうことがわかった。このことからすれば、前記した一〇語は「十六夜日記」の特徴的語群と言えそうである。

以上、「夜の鶴」の名詞の延べ語数における品詞別構成比率に關連して、「十六夜日記」におけるそれと比較しつつ、いくつかの点をみてきたが、そこからは、

1 異なり語数、延べ語数の品詞別構成比における名詞の比率の一般的傾向は、『語い表』所載の一四作品でみる限り、延べ語数での比率の方が異なり語数におけるそれよりも低くなるというものであったが、「夜の鶴」においては逆になっていた。これは、「夜の鶴」に使用度数の多い名詞が存し、これが全体に

おける延べ語数での名詞の比率を高めている

- 2 「夜の鶴」における使用度数の多い名詞の中には、「こと」「ひと」「こころ」「よ」「やう」等、多くの作品に共通する基本的なものも存するが、「うた」「だい」「つき」のような、記述内容と直接結びついた、「夜の鶴」の特徴語と言える頻用語も存する

- 3 「十六夜日記」において頻用されている名詞の中にも、上述2と同様、「十六夜日記」の各章の内容と密接に関係した、特徴語と言えるものが存する
 のような点がわかった。

四

次に、語種別の使用実態についてふれることにする。

表(5)、表(6)は、「夜の鶴」、「十六夜日記」の語彙について、語種別の異なり語数、延べ語数を、それぞれの構成比率とともに示したものである。この表(5)、表(6)を一瞥してわかることは、「夜の鶴」の和語の比率の低さ、漢語・混種語の比率の高さということであろう。

「夜の鶴」における漢語の比率の高さは、他の作品と比較した場合、どの程度のものなのかを、『語彙表』所載の一四作品と比較してみると、異なり語数での比率においては、「徒然草」(二八・一パ

表(5)

	和語	漢語	混種	合計
異なり語数	440	74	11	525
%	83.8	14.1	2.1	100.0
延べ語数	1,029	137	14	1,180
%	87.2	11.6	1.2	100.0

表(6)

	和語	漢語	混種	合計
異なり語数	1,151	83	9	1,243
%	92.6	6.7	0.7	100.0
延べ語数	3,277	115	9	3,401
%	96.4	3.4	0.3	100.1

ーセント)、「大鏡」(二五・五パーセント)、「方丈記」(二〇・一パーセント)よりは相当低く、中古の諸作品と比較すると、「枕草子」(二二・二パーセント)、「紫式部日記」(一一・二パーセント)とは比較的近似するものの、他の作品より相当高いものとなっている。この点、「十六夜日記」におけるそれが六・七パーセントと、「竹取物語」(六・七パーセント)、「蜻蛉日記」(六・五パーセント)、「更級日記」(七・五パーセント)、「伊勢物語」(五・三パーセント)等の作品に近似しているのと大きな相違が存する。

また、延べ語数での比率においても、「夜の鶴」のそれは、「大鏡」(二四・九パーセント)よりは低く、「徒然草」(二二・四パーセント)、「方丈記」(二〇・六パーセント)と近似するものの、中

古の作品とは「紫式部日記」(九・七パーセント)を除き、大きな差が存することがわかる。一方、「十六夜日記」においては、「蜻蛉日記」(三・五パーセント)、「更級日記」(四・一パーセント)、「伊勢物語」(二・六パーセント)等と近似した値をとり、異なり語数の場合と同様に、「夜の鶴」と大きく相違している。

以下、「夜の鶴」における漢語の使用実態について、「十六夜日記」におけるそれと比較しつつ、具体的にみることにする。

「夜の鶴」において使用された漢語は、表(5)に示したように、異なり語数七四である。一方、「十六夜日記」におけるそれは、表(6)に示したように、異なり語数八三である。また、この兩作品に共通する漢語は一一語である。したがって、「夜の鶴」にのみ使用されている漢語は六三語、「十六夜日記」にのみ使用されているそれは七二語となる。

以下、「夜の鶴」に使用された漢語と、「十六夜日記」に使用された漢語とについて比較してみると、

- 1 「夜の鶴」に単独使用された漢語六三語のうち、大野晋氏が「平安時代和文脈系文学の基本語彙」に関する二三の問題(『国語学』八七集、昭和四六年一二月)において示された「平安時代和文脈系文学の基本語彙」(以下、「平安和文基本語彙」と略称する)であるものは、

「げんじ(源氏)」「じやうず(上手)」「せち(切)」「だいなごん(大納言)」「ないし(内侍)」「にようぼう(女房)」

の六語。一方、「十六夜日記」におけるそれは、

「あざり(阿闍梨)」「いち(一)」「きやう(経)」「ぎやうかう(行幸)」「さいぐう(齋宮)」「さいしやう(宰相)」「さう(左右)」「さうし(草子)」「さんみ(三位)」「じじゆう(侍従)」「たいふ(大夫)」「ちゆうじやう(中将)」「にふだう(入道)」「にようるん(女院)」「ほい(本意)」「れい(例)」「るん(院)」「ゑ(絵)」

の一八語であり、大きな相違をみせている

- 2 「十六夜日記」には、暦日に関する漢語が、

「じふくにち(一九日)」「じふしちにち(一七日)」「じふはちにち(一八日)」「じふろくにち(一六日)」「にじふいちにち(二一日)」「にじふくにち(二九日)」「にじふごにち(二五日)」「にじふさんにち(二三日)」「にじふしちにち(二七日)」「にじふしにち(二四日)」「にじふにち(二二日)」「にじふはちにち(二八日)」「にじふろくにち(二六日)」

のように一三語存するが、「夜の鶴」には、それが一例も存しない

のような相違が存することがわかった。このような点からしても、「夜の鶴」における漢語の使用は、特徴的であることが予想される。

以下、「十六夜日記」と共通しない「夜の鶴」の漢語六三語について、特徴的であると思われる点をあげていく。

まず、第一に、「夜の鶴」の漢語には、書名やそれに類するものが多い、という点を指摘することができる。以下、具体的に示すと、

「きんえふ（金葉）」「げんじ（源氏）」「ごしふる（後拾遺）」
 「ごせん（後撰）」「さんだいしふ（三代集）」「しか（詞花）」
 「しふる（拾遺）」「しふるせう（拾遺抄）」「しよがくせう（初学抄）」
 「しんこきん（新古今）」「せんざい（千載）」「なんごしふる（難後拾遺）」
 「まんえふ（万葉）」「まんえふしふ（万葉集）」

のように一四語存する。これに対して、「十六夜日記」の漢語（「夜の鶴」と共通しない七二語）のうち、これに相当するものは、「ほけきやう（法華経）」の一語に過ぎない。⁽¹¹⁾

また、「夜の鶴」の漢語のうち、「十六夜日記」と共通しない使用度数二以上のものは、

「く（句）」「こきやう（故郷）」「さくしや（作者）」「さんだいしふ（三代集）」「しき（四季）」「しだい（次第）」「しゆんぜいきやう（俊成卿）」
 「しんこきん（新古今）」「じやうず（上手）」「せんじや（撰者）」「ていかきやう（定家卿）」「ないし（内侍）」「ふぜい（風情）」「ほつしん（発心）」「ほんか（本歌）」
 の一五語である。これらを一瞥すると、「しゆんぜいきやう」「ていかきやう」のような歌人名や、「く」「さくしや」「せんじや」「ほんか」等の用語をはじめとして、その多くは和歌に関するものであることがわかる。

以上ふれてきたものの他にも、「夜の鶴」の漢語には、

例16 臨期_レ交_レ約_レ恋といふ事を (四ウ③・④)

例17 兩人をおもふ恋といふ題をえて (五オ⑥)

のような、結び題で使用された「こ」「やく」「りやうにん」、

例18 まつ下の七々の句をよく思したゝめて後第二の句より上句

をよく案して後にはしめの五字をはもとすゑにかなふやう

に (六オ⑥・⑦・⑨)

のような、和歌の句に関する「しちしち」「だいに」「ごじ」、また、

「四季の哥」(一一ウ⑥、一二オ⑥・⑦)、「なしつほの五人」(一四ウ④)、「みれんの哥よみ」(一四オ③)のような形で使用された「し

き」「ごにん」「みれん」等をはじめとして、和歌に関する語が多数

存している。また、

例19

仏のみちをつたへうけたまはるにもつみもくとくもさたま

りたるぬしもなしこのめはをのつから發心すたゝ心をえ善

知識にあふ事こそかたき事なむなれ……みのりのしるへは

聖教世に猶とゝまりて哥のしるへは万葉古今もなをあとゝ

とまりけり發心修行にもすゝむ人あらは……とか無上菩

提をもえさらむ道心ある人とすきたる人とのこゝろこゝろ

にそよるへき法命をつき哥の道をたすくる事かすならぬ人

にはよらしとそおほゆる

のような形で、仏道になぞらえて歌道に関して述べる部分に集中して、「くどく」(一〇オ⑩)、「ほつしん」(一〇ウ①・⑨)、「ぜんぢ

しき」(一〇ウ②)、「しやうげう」(一〇ウ⑥)、「しゆぎやう」(一〇ウ⑨)、「むじやうぼだい」(一一オ①)、「だうしん」(一一オ②)、「ほふみやう」(一一オ④)のような仏教関係の漢語が存すること
も注意される。

以上、「夜の鶴」に使用された漢語語彙について、その使用実態をいささかみてきたが、その結果、「夜の鶴」の漢語語彙の頻用は、歌論としての必然からのものであること、また、漢語語彙には、使用度数の多少にかかわらず、「夜の鶴」の特徴語とでも言うべきものが多数含まれていること等がわかった。

五

次に、「平安和文基本語彙」と比較することにより、「夜の鶴」の語彙の性格をみることにする。

表(7)は、「夜の鶴」の語彙と、大野晋氏が示された「平安時代和文脈系文学」(以下、「平安和文」と略称する)の語彙とを、それぞれ累積使用率によって一〇段階に分け、「夜の鶴」の累積使用率約五〇パーセントに当たる部分と、「平安和文基本語彙」に関する部分とを抜き出し、前者を基準にして段階別に所属語数を示したものである。また、表(8)は、「十六夜日記」の語彙と、「平安和文」の語彙とに関して、同様に示したものであ

表(7)

段階	「平安和文」の語彙における段階								非共通語
	1	2	3	4	5	6	7	8	
1	1	0	0	0	1	1	0	0	0
2	1	2	1	2	0	0	0	0	0
3	2	2	2	2	1	0	0	1	3
4	1	1	5	4	5	1	1	2	2
5	0	1	1	2	2	1	4	2	4
合計	5	6	9	10	9	3	5	5	9

表(8)

段階	「平安和文」の語彙における段階								非共通語
	1	2	3	4	5	6	7	8	
1	5	3	0	0	0	0	0	0	0
2	1	5	1	2	4	1	1	0	0
3	0	1	7	5	7	1	2	1	1
4	0	1	4	5	6	7	6	5	2
5	0	0	3	8	12	13	8	9	7
合計	6	10	15	20	29	22	17	15	10

る。したがって、表(7)、表(8)においては、「夜の鶴」および「十六夜日記」に関しては五段階まで示したが、「平安和文」の語彙に関しては、その累積使用率からして、八段階の一部まで示したことになる。なお、表中の「非共通語」とは、あくまでも「平安和文基本語彙」と共通しないという意味であり、「平安和文」の語彙に、その使用例が存しないという意味ではないことを、一言つけ加えておく。

以下、この表(7)、表(8)を使用し、「夜の鶴」および「十六夜日記」の語彙における特異な使用語についてふれる。

「夜の鶴」および「十六夜日記」の語彙のうち、「平安和文」の語彙における所属段階との差がどの程度ある語をもって特異な使用語とするかについては、慎重に考える必要があるが、ここでは、いちおう、上、下各二段階以上の差があるものをもって特異な使用語とする。

ここでみる特異な使用語を、右のように規定すると、「夜の鶴」におけるそれは、

I 「夜の鶴」の語彙における所属段階の方が上位のもの

「うた(歌)」「よむ(詠)」「おぼゆ(覚)」「まうす(申)」「だい(題)」「つき(月)」「やさし(優)」「く(句)」「こひ(恋)」「う(得)」「うたよみ(歌詠)」「およぶ(及)」「じやうず(上手)」「もし(文字)」「よる(因・由・依)」「うけたまはる(承)」「かきおく(書置)」「ことのは(言葉)」「ことば(言葉)」「しゆんぜいきやう(俊成卿)」「すがた(姿)」「ふせい(風情)」「ふるし(古)」「よくよく(能能)」「よす(寄、下二段)」

II 「夜の鶴」の語彙における所属段階の方が下位のもの

「あり(有・在)」「なし(無)」「おもふ(思)」「す(為)」「きこゆ(聞)」「さま(様)」

のように、Iには二五語、IIには六語、それぞれ存する。また、

「十六夜日記」に関して、同様にみると、

I 「十六夜日記」の語彙における所属段階の方が上位のもの

「うた(歌)」「ところ(所)」「みやこ(都)」「つき(月)」「やま(山)」「いづ(出)」「みち(道)」「ゆく(行)」「なみ(浪)」「かく(書)」「かへりごと(返事)」「そら(空)」「あと(跡)」「よむ(詠)」「こ(子)」「たつ(立)」「とどまる(止・留)」「ふみ(文)」「かきつく(書付)」「とふ(訪・問)」「うら(浦)」「とほし(遠)」「まくら(枕)」「そで(袖)」「みづ(水)」「あづまち(東路)」「かく(掛、下二段)」「かみ(神)」「さと(里)」「しぐれ(時雨)」「たびごろも(旅衣)」「ひとつ(一)」「ゆめ(夢)」「けぶり(煙)」「こゆ(越)」「こよひ(今宵)」「たび(旅)」「たより(便)」「ふるさと(故郷)」「ゆき(雪)」「かかる(掛)」「じじゆう(侍従)」「ふじ(富士、地名)」「ほととぎす(時鳥)」「あま(海人)」「ありあけ(有明)」「うみ(海)」「おとづれ(訪)」「かきそふ(書添)」「くさ(草)」「ことば(言葉)」「しぐる(時雨)」「せき(関)」「のこる(残)」「ひま(暇・隙)」「やど(宿)」「ある(荒)」「うつ(宇津、地名)」「おぼつかなさ(覚束無)」「おもかげ(面影)」「かたはら(傍)」「かは(川)」「さそふ(誘)」「やさし(優)」

II 「十六夜日記」の語彙における所属段階の方が下位のもの

「もの(物・者)」「いま(今)」「うへ(上)」「さま(様)」

のように、Iには六四語、IIには四語、それぞれ存することがわか

る。

右の語群を比較すると、「夜の鶴」「十六夜日記」ともに上位段階に所属するものは、「うた」「よむ」「つき」「やさし」「ことば」の五語、ともに下位段階に所属するものは、「さま」の一語であることがわかる。

ところで、「十六夜日記」の使用語彙については、既に、江口正弘氏よって詳細な論が発表されている¹³⁾。それによると、「十六夜日記」の名詞語彙のうち、上位一七位までの二四語中一五語は、『語い表』の一四作品全体での名詞の使用度数上位四〇語の中に入っていないことから、

名詞語彙の使用順位のかたよりも、十六夜日記が旅行記と鎌倉滞在中の都との消息という素材のかたよりを示すものであると理解すべきであろう

とされている。江口氏が指摘された一五語で、「十六夜日記」におけるIの語群と共通するのは、

「うた」「みやこ」「なみ」「みち」「かへりごと」「そら」「あと」「あづまち」「しぐれ」「たびごろも」「ひとつ」「みづ」「ゆめ」の二三語である。また、「十六夜日記」における語群Iからは、上記一三語以外にも、素材のかたよりを示すものとして、

「うら」「まくら」「たび」「たより」「ふるさと」「おとづれ」「せき」「やど」「おもかげ」

等の語を指摘することができる。

江口氏は、動詞についても『語い表』での使用実態と比較し、

上位六位までは幾分順位には出入りがあるが、全く同じ語である。それ以下は十六夜日記には敬語動詞が少なくそれに代って「行く、出づ、とどまる、渡る、越ゆ」というような旅行記らしい、位置の移動に関する語や、「よむ(詠)、書く、書き付く」というような語の使用の多さが注意される¹⁴⁾

とし、これは、「十六夜日記」と「源氏物語」「枕草子」等との内容の質的な差による相違であるとされている。「十六夜日記」における語群Iには、江口氏が指摘された語のうち、

「ゆく」「いづ」「とどまる」「こゆ」「よむ」「かく」「かきつく」

の七語が含まれ、同様のものとして、「たつ」「かきそふ」等も存していることがわかる。

以上、江口氏の調査を手がかりにし、「十六夜日記」の語彙における所属段階が上位の語群について、いささかふれたが、では、「夜の鶴」の語彙における特徴的な語群の使用実態はどのようなものであるのかを、以下、みることにする。

「夜の鶴」の語彙における所属段階の方が、「平安和文」の語彙における所属段階よりも上位のものは、既にふれたように、二五語存する。これを一瞥すると、そのほとんどが和歌に関する語であることがわかる。特に、「夜の鶴」において一段階に所属する「うた」(「平安和文」の語彙における段階では六段階。以下、同様)、「よ

む」(五段階)、三段階に所属する「だい」「く」、四段階に所属する「うたよみ」「もじ」(以上の四語は、いずれも「平安和文基本語彙」ではない)等の存在は、「夜の鶴」の所属段階上位の語の性格を、換言すれば、「夜の鶴」という作品の素材と内容の質を端的に物語っていると言えそうである。

次に、「夜の鶴」の語彙における所属段階の方が下位の語についてふれる。

ここに属するのは、既述した六語である。これらの語について注意しなければならないのは、「夜の鶴」での使用実態と相違し、「十六夜日記」においては、「あり」「なし」「す」が、「十六夜日記」の語彙での所属段階、「平安和文」の語彙での所属段階とも一段階、「おもふ」が、ともに二段階、「きこゆ」が、「十六夜日記」の語彙での所属段階三段階、「平安和文」の語彙での所属段階二段階と、六語中五語が許容範囲内での使用であり、特異語となっていない点である。これは、「夜の鶴」と「十六夜日記」との記述態度の差を示すものとして注目に値する。また、同時に、「夜の鶴」における所属段階の方が上位の語群の中に存する「おぼゆ」が、「十六夜日記」の語彙での所属段階五段階、「平安和文」の語彙での所属段階四段階と、「十六夜日記」においては特異語となっていない点にも注意を払うべきであろう。

歌論としての「夜の鶴」にとつては、主観的な事物の存在、非存在や行為自体が問題ではなく、その冒頭で、

さりかたき人の哥よむやうをしへよとたひくおほせられ候へともわかよくしりたる事をこそ人にもをしへ候なれいかてかはといたみ申候をあなかちにうらみおほせられ候もわりなくてすらなる事をかきつゝけ候ぬるそゆめく人にみせられさふらふまし

と言っていることでもわかるように、「さりかたき人」に歌に関する具体的な事物や行為を伝えることが問題であった。また、「夜の鶴」は、文体的には、いわゆる書簡文で書かれているが、このような文体的条件も、その一因となって、「夜の鶴」の使用語彙と「十六夜日記」のそれとは相違したものとなったのであろう。

六

以上、「夜の鶴」に使用された自立語語彙に関して、主として「十六夜日記」におけるそれと比較することによって、その使用実態をみてきた。以下、その結果を再掲することにより、本稿のまとめとしたい。

1 「夜の鶴」および「十六夜日記」の品詞別構成比率は、異なる語数においては「伊勢物語」や日記類に、また、延べ語数においては「大鏡」や「方丈記」に、相対的に近似している。

2 形容語類の異なる語数における比率をみると、「夜の鶴」は一六・〇パーセントと、『語い表』所載のどの作品におけるそ

れよりも高い。また、「十六夜日記」のそれは一三・九パーセントであり、中古の日記類と、相対的に近似している。この点
は、「十六夜日記」が中古の日記文学作品の系譜を継ぐものであると言われる、その傍証となろう。

3 品詞別構成比率について、異なり語数に関するそれと、延べ語数に関するそれとの関係からすると、「夜の鶴」における名詞の使用は特徴的であると言える。これは、「夜の鶴」に、他作品においても頻用される「こと」「ひと」「ところ」「よ（世・代）」等のような基本的な語とともに、歌論としての「夜の鶴」の内容に直接関わる「うた」「だい」「つき」のような高頻度語が存していることと関係している。

4 語種別構成比率に関して、「夜の鶴」と「十六夜日記」や中古の和文脈系作品とを比較すると、「夜の鶴」においては、漢語および混種語の比率が高いことがわかる。

5 「夜の鶴」において使用された漢語をみると、書名やそれに関連したものが多い。これは、歌論としての記述内容の必然から使用されたものである。また、「しゅんぜいきやう（俊成卿）」「く（句）」「さくしや（作者）」等の語、結び題で使用された「ご（期）」「やく（約）」「りやうにん（兩人）」、和歌の句に關する「しちしち（七々）」「だいに（第二）」「ご（五）」「ご（五字）」等の使用も、同様に考えられる。

6 「夜の鶴」の語彙のうち、「平安和文」の語彙における所属

段階との比較において、特異な使用例と考えられるものは、二つのグループに分けられる。

「夜の鶴」の語彙における所属段階の方が上位のものは、その多くが和歌に関するものであり、特に、「うた（歌）」「よむ（詠）」「だい（題）」「うたよみ（歌詠）」「もじ（文字）」等の語は、「夜の鶴」の素材と内容を端的に示すものとなっている。

「夜の鶴」の語彙における所属段階の方が下位のものは六語存するが、うち五語が「十六夜日記」における使用実態と、大きく相違している。「夜の鶴」においては、事物の存在や非存在を示す「あり（有・在）」「なし（無）」、漠然と行為を示す「す（為）」等の語の使用が少ない。一方、「十六夜日記」におけるこれらの語の使用は、「平安和文」におけるそれと大差ないものとなっている。これは、歌論としての「夜の鶴」と、日記紀行文学としての「十六夜日記」との記述態度の差によっていると思われる。

〔注〕

(1) たとえば、築瀬一雄・武井和人氏『十六夜日記・夜の鶴注釈』（昭和六一年八月、和泉書院）四六八頁。

(2) 以下、統計に関して『語い表』とした場合は、宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄氏編『フロッピー版古典対照語い表および使用法』（平成元年九月、笠間書院）による。

(3) 「夜の鶴」については、森本元子氏『「夜の鶴」校異』（『相模女子大学紀要』四四、昭和五六年二月）の学恩に浴した。

- (4) たとえば、風巻景次郎氏「阿仏尼の文学―特に十六夜日記に於いて―」(『国語と国文学』六卷一〇号、昭和四年一〇月)。
 風巻氏は、「十六夜日記」を日記文学の系統を引いている作品とはされるが、その評価に関しては、
- 十六夜日記は日記文学として取り扱はれてゐるけれども、全體から見る時は、しかく單純に日記文学としては取り扱はるべきものでない。この作からはそのまゝには作者の性格も抽出する事は出来がたいのである。そして又十六夜日記の如き作品は、作者の個人性を問題にして讀む限り、すぐれた感銘を得る事は出来ない作品である
- と、否定的である。一方、「十六夜日記」を、平安女流日記文学の系統に立つ作品としつつも、新しいジャンルとしての紀行文学の流れに位置づけようとする比留間喬介氏「十六夜日記」(新註国文学叢書、昭和二六年五月、講談社)をはじめとする諸先学の見方も存する。
- (5) 「基本語彙に関する二三の研究―日本の古典文学作品に於ける―」(『国語学』二四集、昭和三年三月)。
 (6) たとえば、山口仲美氏「平安仮名文における形容詞・形容動詞」(『国語語彙史の研究、一』昭和五年五月、和泉書院)。
 山口氏は、大野晋氏の品詞比率におけるジャンル別説を、宮島達夫氏の「語い表」のデータを用いての再検討の結果、否定的にとらえられた。そして、平安仮名文の形容語(形容詞・形容動詞)のあり方を、和文系言語、漢文訓読系言語、口誦系言語という文体論的な範疇から説明できるとされた。それによれば、和文系言語においては形容語が多いが、他の二つの言語においては、それが少ないということがある。
- (7) 「十六夜日記の語彙」(『熊本女子大学学術紀要』第二八巻一號、昭和五年三月)。
 (8) 国立国語研究所『現代雜誌九十種の用語字字』(国立国語研究所報告二五、昭和三九年三月、秀英出版)によれば、現代雜誌九〇種の調査では、動詞は延べ語数での比率が高い。しかし、『語い表』所載の作品においては、表(3)で示したように、現代雜誌の場合とは、必ずしも同傾向となつてはいない。
- (9) 傍線筆者。また、引用のあとの(二オ⑩)は、当該用例が二丁表の一〇行めに存することを示す。なお、(五ウ⑥)のように「ウ」とある場合は、当該用例が「裏」に存することを示す。以下、同様。
- (10) 『十六夜日記・夜の鶴』(講談社学術文庫、昭和五四年三月、講談社)解説二三二〜二三三頁。なお、「十六夜日記」を四部構成とする代表的な説としては、風巻景次郎氏のもがよく知られている。風巻氏は、「十六夜日記」の作品構成について、(4)同論文で、
 より妥當なる切斷の仕方は四段に仕切る仕方、即ち序・紀行・鎌倉滞在中の消息・長歌の四部に分つ仕方であるとされている。
- (11) 「夜の鶴」と「十六夜日記」とに共通する漢語語彙において、書名およびそれに類するものとしては、「こきん」「しよくごせん」「しんちよくせん」の三語が存する。
- (12) 「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」(『国語学』八七集、昭和四六年二月)。ただし、大野氏は、「平安時代和文脈系文学」の基本語彙、および、対象一〇作品の総延べ語数という形で示しておられる。
- (13) (7)同論文。
 (14) (7)同論文。

付記

ある作品の語彙を、他の作品の語彙と比較する場合、意味構造分析によるのが有効であると思われるが、今回は、紙面の都合上、それをなし得なかつた。この点については、稿を改めてふれる予定である。

(平成八年九月三〇日)